No.46
2011. 2. 23

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■ラオスの森を歩く ……1
■クメール シルク 春風にのせて ……2~3
■Nepal 「持続可能な小さな支援」の嬉しいニュース ……4
■Laos 少数民族と黒魔術 ……4
■ハイチ・ミャンマー緊急支援その後 ……5
■鞍山だより第2回 ……6
■南北コリアと日本のともだち展 ……6
■マジカルシュガーと貧困 ……7
■地球の木カフェ in 鎌倉 ……7
■活動日誌 ……7
■INFORMATION ……8

ラオスの森を歩く

「ラオス森の絵本」制作を目指して

私たちの泊った家

地球の木では、JVCのラオス森林保全活動の支援をしていることから、ラオスの森や村の暮らしを皆さんに伝える方法を探っていました。そんな時、絵本作家の田島征三さんと出会いました。絵本「ちからたろう」や「しばてん」などで有名な田島征三さんは、木の実や森に関する作品も多く、ラオスの森の話にも大きな関心を持ってくれました。2010年2月には、地球の木のラオス調査訪問に同行し、現地の小学校で子どもたちに絵本の読み聞かせもしています。今回2度目となるラオス訪問では、前回とは少し違った雨季明けの森をじっくり歩き、「ラオス森の絵本」制作のための取材をおこないました。

村人の暮らしを直に感じる

「ラオス森の絵本」実行委員会　武安ますみ

12月4日、田島さんと私は日本を出発。今回の通訳として、ラオスの少数民族「モン族」の研究家として活躍される安井清子さんとサワナケートで合流。今回はいつもの支援村訪問とはちょっと趣向が違い、村に数日間滞在して、森や村人の暮らしを間近に観察し、少しでもラオスを直に感じることが目的である。最初に入ったのはボンシーケオ村。村はブルー族の村で、標準のラオス語が通じないため、JVCスタッフでブルー族出身のホンケオさんが大活躍してくれた。ツアーガイドとして私たちの面倒をみてくれたのは、JVCスタッフのクワンさんだ。泊った家は、12畳一間ほどの間取りで、壁は葉っぱ、両親と子ども8人と長男の嫁の11人家族。そこに私たち5人が泊った！

3日間の滞在で、子どもたちとも何となく顔見知りになり、ブルー語を教えてもらったりした。また、毎日今までに入ったことのないような深い森を村人に案内してもらい、生活に使う草や木をいろいろ教えてもらえた。森にまつわる言い伝えも初めて聞くものだった。村の女性と一緒に川へ行き、魚を捕るところを見せてもらったりもした。

早朝に鶏の声と米をつく音とともに一日が始まる。火を焚いて食事の支度、子どもは水汲みをし、大人は森へ農作業に行ったり、村で新しい家を建てる共同作業をしていたり。子どもたちは学校、小さい子は集まって遊び、家の前では、竹で家の壁になる部分を編んでいるおじいちゃん。その横では焚火でトカゲを焼いておやつにする孫娘がいる。向こうでは機織りをする母娘の姿がある。そんな村の日常を感じることができ、村人と「近く」なった感じがした。田島さんは、絵になる対象を見つけてはスケッチをしている。どんな絵本のイメージができているのだろう、と楽しくなってくる。村の学校では、安井さんによる絵本の読み聞かせが、子どもたちと私たち一行の距離を少し縮めてくれたような気がした。ケンデン村では、川で水浴びをしたり、村人と一緒に山へも行った。毎日森歩きをして、田島さんをヘロヘロにした今回のツアー。「ラオス森の絵本」が、少しずつ形になりつつある。

米をつく少女たちと田島さん

■発行 特定非営利活動法人 地球の木 理事会 ■発行責任 丸谷士都子 ■編集 広報部 ■事務局 〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F
■TEL 045-228-1575 ■FAX 045-228-1578 ■E-Mail:chikyunoki@e-tree.jp ■http://e-tree.jp/

プノムチソー遺跡にて

クメール シルク 春風にのせて～

事務局長　筒井由紀子

1月21日から27日まで、クメールシルクチームの植田泉さんと二人でカンボジアを訪れた。今回の主な目的は昨年の7月に発注した、生活クラブ生協神奈川の共同購入用のシルクのスカーフや小物などを受け取りにいくことである。この取り組みのキャッチフレーズは「共同購入で国際協力」。生活クラブ神奈川の5万人の人々に地球の木のカラーチラシが届くことになる。初めてのことで不安もあるが、単にシルクのスカーフや小物を紹介し販売するというだけでなく、カンボジアのことに関心をもってもらい、地球の木の成り立ちや現在の活動を多くの人に知ってもらうよい機会になればと思っている。

センターの人たちと一緒に（中央が筆者）

タケオセンター

1月21日、タケオの職業訓練センターを訪問。着いてすぐ、あいさつもそこそこに生活クラブ共同購入のカラーチラシを見せると訓練生たちが「わーっ」と集まってきた。自分たちの作ったスカーフがカラーのチラシに載っている。裏面には、センターの写真と絣を織る工程が写真で説明されている。その中に自分たちが写っているのだ。小さな自分を見つけては、少し恥ずかしそうに、そして嬉しそうに笑っている。私がチラシを手に、「たくさんの人たちがこのスカーフができあがるのを楽しみに待っているのよ」と話すのを皆真剣に聞いている。「サンプルどおり、丁寧に作って欲しい」と私たちが何度も何度も繰り返してきた意味が今わかったかもしれない。

コン・パラーさん（40）主婦

家族は夫と子ども5人。
収入は食費、子どもの教育費、冠婚葬祭の費用に使う。

今回注文したシルクのスカーフは、モダンな透けた模様と伝統的な絣の2種類。モダンな柄は、織りが比較的簡単なので、タケオセンターの上手な生徒たちが中心となって織っている。絣（かすり）柄は技術がいるため、センターの卒業生と近くの女性たちが手伝って織っている。スカーフを織って得た収入については、子どものいる人はすべて米以外の野菜・肉などの食費と子どもたちを学校に行かせるために使うそうだ。農村では、米だけならなんとかなるが、その他のモノを購入するには現金が必要だ。貧困から抜け出すためには、教育が必要だということもわかっている。しかし、村にいながら現金を稼ぐのは簡単なことではなく、織物で現金を稼ごうと思っても、高価な生糸を買う余裕がある家でなければ、織りの仕事を安い工賃で請け負うという形になる。

一方、少女たちは、その収入を自分のためにも使うという。「NGOで働く」「看護師になる」ための学費として使うのだ。彼女たちにとって、農業の傍ら「機を織る」暮らしは、あこがれのものではないらしい。彼女たちは「手に職をつける」ということが、夢を実現する手段であると同時に、夢が実現しなかったときの「保険」ともなることをちゃんと知っている。

センターの近所で絣柄を織る女性

ライ・リムさん（17）
センターのリーダー

9人兄弟と住んでいる。
収入は自分と弟の学費、文房具に使う。
「将来はデザインもやりたいし、看護師にもなりたい。素敵な絣を織れるようになりたい」

精練したシルク糸を乾かす

楽しそうに織っているようにも見えるのだが、全員が口を揃えて言ったのが、「染めるのが大変」だということ。糸をくくって絣の部分を染めるときに、床に置いた大きな洗面器に糸の束を力一杯打ち付けて染料を染みこませる作業が「キツイ」らしい。今回の注文では、赤い色は自然染料のラックカイガラムシを使っている。化学染料を使ったものに比べて自然染めは比べようもないほど手間と時間がかかる。「ユキさんもやってみて」と言われて1度だけ試してみるが特にたいしたことはない。しかし、これを300回やると聞くと納得する。織物の先生や生徒たちの指の付け根には、「染めダコ」ができている。細かい模様を出すためにひとつずつ糸をくくっていく作業もかなり根気がいる。スカーフを手にした人たちが、この気の遠くなるような手作業が生み出す「温かさ」を感じてくれることを祈るばかりである。

染めをする（以前は素手で作業をやっていたのでゴム手袋を買った）

シア・ナーさん（16）
くくりや染めを主に担当

両親はいない。祖母、叔母と住んでいる。
「センターは楽しい。収入は、勉強のために使う。将来はNGOで働きたい」

織り糸をくくる

MDSF（Modern Dress Sewing Factory）訪問

絣を使ったブックカバーと小物入れの製作は、エイズ/HIV陽性のシングルマザーを支援するMDSFにお願いした。

この工房では、シルクのバッグ、エプロンやユニフォームなどを作っている。地球の木にも度々協力をしてくれているフェアトレードショップ「トラグーン」の聖実さんが指導をしていた工房である。生産者たちはHIV陽性者のため、体調が悪い時があったり、疲れやすかったりするので、健康な人の様に働くのは難しいという。また、全員が夫から感染し、そして子どもが小さい時に夫を亡くしたりしている。病気を抱え、育ち盛りの子どもたちを育てていくのはかなり厳しいことである。皆、口を揃えて「同じ立場の人たちが集まっているので、一緒にNGOのイベントに参加したり、悩みを話しあったりできるのは、とても楽しい」と言う。HIVに対する啓発は進んでいるがまだまだ、偏見や差別は多い。彼女たちが肉体的にも、精神的にもつらい状況の中で一生懸命に作ったブックカバーや小物入れ。今回のように、製作を依頼することで、彼女たちの生活を少しでも支えることができればと思っている。

サウ・アイムさん　44才

子どもが2人（13才、11才）。
10年前に夫がエイズで亡くなった。夫の治療のために田舎の家や土地を売り払った。自分も検査したら陽性だった。子どもたちは元気で大丈夫だ。
「日本の皆さん、ずっと買ってください。私もずっと作りますから、そして大切に使ってください」

変わりゆくカンボジアの農村

タケオへ向かう国道2号線。これまでは、道路脇にガラスの空き瓶にガソリンを入れて売る屋台のような店がいっぱい並んでいた。バイクの人たちが主に利用するのだろうが、このところ、次々と新しい「ガソリンスタンド」ができている。日本にあるような普通のガソリンスタンドだ。

結婚式と見間違うような派手なガソリンスタンドのオープニングセレモニーをおこなっているところを見かけた。ほんの100メートルほどの間に向かい合って建っているところもある。この10年でGNP（国民総生産）が10倍になったというカンボジア。タケオの村でも電気が近くまで来ているという。村の暮らしはどんどん変わっていく。

新しいガソリンスタンドが開店

from Nepal

「持続可能な小さな支援」の嬉しいニュース

楽しそうに地域マップ作りをする女性たち

ネパールのコーディネーターのサルバジットさんから、嬉しい報告が届きました。収入創出プログラムに参加した第1期（2008年度）の9人すべてが5,000ルピー(5,600円)の貸付金を返却したのです。

乾期の水不足や、害虫の被害などで、うまくいかない品目もありましたが、野菜が少なくなる時期に栽培可能な野菜選びや、種や作物の保存方法、自然堆肥の作り方などのトレーニングの成果で順調に収穫をあげ、村の市場や近郊の町で売ることで収入を得られた品目もありました。この取り組みは、貧困家庭に無利子で融資を行い、現金収入を創出するだけでなく、地域マップなどを実際に作って村人がその村の資源などの現状を把握し、支援が最も必要な家庭はどこかを、皆で話し合って支え合う、という住民主体の「安心して幸せに暮らせる地域開発」につながっていきます。返却された貸付金は、次の年度の収入創出プログラムの融資に当てられますので、資金は回転していく計画です。

村人は、

「このプログラムに参加できてよかった。感謝している」

「現金収入で　子どもや孫の授業料を払ったり、教材や文具を買うことができた」

「トレーニングは役に立つので、続けてほしい」

「野菜が少なくなる時期は、水が無く大変だった。作物が枯れたりした」

「融資を受けて、質の良い種を買うことが出来た」

「マンガルタールに野菜の協同組合を作って、野菜の値段を決めるといい」

などの感想や意見を述べています。

第2期、3期のプログラムも、各地区で進行中です。

次回報告をお待ちください。

（ネパールチーム　岸　夏代）

from Laos

少数民族と黒魔術

地球の木会員の皆様、こんにちは。ご支援いただいているラオス・サワナケート県における森林保全と持続的農業の活動に関連して、今回は「少数民族と黒魔術」について書いてみます。

我々の活動する村のうち、半数以上は少数民族ブルー族の村です。ラオスでは大まかに低地ラオ族、中高地ラオ族、高地ラオ族、といった大きな分類があり、ブルー族は中高地ラオ族ということになります。しかしこのブルー族という分類は、国による49の少数民族の分類には存在しません。というのも、もっと細分化したマコン族とかカタン族というのが民族名として認識されており、ブルー族はそれらの中高地ラオ族の民族の中でもサワナケートなど中部から南部に住むいくつかの民族の総称的、つまり中分類した場合のグループ名になるようです。

低地ラオ族の人々の中には、少数民族の呪術師（呪術医）に黒魔術をかけられると思っている人もいます。あるタイの石鹸会社の石鹸がそれを洗い流してくれる、ということで、中高地ラオ族のところに泊まる際は、それを持っていく人もいると聞き、呆れたこともありました。そのときはブルー族に対する差別意識への不快感もあり「非科学的も甚だしい」などと思ったものですが、一方で村の人たち自身が、この私には「非科学的も甚だしい」と思える「黒魔術」や「呪術師」を大変大切に思っていますし、その力を信じています。社会的に優位にある低地ラオ族の、劣位にある中高地ラオ族に対する振る舞いについては、それらを「非科学的」と切って捨て、中高地ラオ族がそれらを大切にしていることについては、「村の伝統的考え」としてむしろ美しいもののように扱う。理論的にはダブルスタンダードということになるでしょう。

そんな思いを持っていたある日、極めて合理的なことを言う呪術医にお会いする機会がありました。ある村の呪術医さん、普通のおじさんなのですが、森林担当グレンさんの目の腫れに術を施す際、このようなことを言ったのです。「この腫れが精霊の仕業なら、私の術で治る。もし感染症なら病院に行くように」。うーん、それはその通り。グレンさんがよく分かった旨を伝えると、呪術医さんは薬草を噛んでは息を患部に吹きかけました。その結果でしょうか、グレンさんの目の腫れは、翌日にはだいぶ引いていました。

（JVCラオス事務所現地代表　平野 将人）

足を怪我した行政官の厄払いをとりおこなう呪術師

ハイチ・ミャンマー緊急支援ありがとうございました

皆様からの募金（それぞれ約30万円）が復興に役立っています

大地震～その後のハイチ

23万人の犠牲者、300万とも言われる被災者を出した大地震から１年が過ぎました。政治経済の中枢が壊滅状態になった被害規模の大きさから、国際機関、各国政府が救援に乗り出していますが、１年たった今も、首都は瓦礫の山が残り、130万もの人々がテント生活をしています。

私たちが支援しているセスラ校も、校舎が半壊しましたが、皆さまからの義援金でいち早く仮設教室を建て、町中で一番早く学校再開ができました。また、校長が一時避難していた農村に、セスラの分校を開設することができました。そしてこの農村で１ヘクタールの土地を購入し、学校を建設する予定です。農村に出来る学校は、本校と分校、都市と農村を結び、農業の担い手を育てる足がかりにすることが出来ます。

ハイチの人々はこれまで、貧困の中で知恵をしぼって食べていくことを考えてきました。産業らしい産業がないため、零細な商売が農村と都市を結び、モノとお金が流通していたのです。でもそれが崩れ、手を伸ばせば食べ物が手に入るような支援がハイチを悪くすると心配しています。

コレラが流行したり、ハイチはまだまだ大変です。ハイチの未来は子どもたちとともにあると信じ、希望を分かち合う支援を続けます。

（ハイチの会セスラ　代表　高岡美智子）

ミャンマーサイクロン復興支援 孤児院新寮兼シェルター完成

門をくぐると、300人の子ども達が大きな声で歌っています。元気な歌声！それに、顔が生き生き輝いています！被災者250万人、死者14万人を出した2008年5月の巨大サイクロンで全壊してしまった木造の寮の跡地に、立派な寮兼シェルターが完成しました。サイクロン後、元気のなかった子ども達がこんなに大きな声で歌えるようになったとは……。目頭が熱くなるのを感じました。

地球の木の皆様にはたくさんの温かいご理解とご協力をいただき誠にありがとうございました。ご寄付は緊急支援とシェルター建設費に大切に活用させていただきました。

2010年10月ミャンマーに緊張が走りました。サイクロン後に設置された災害警報が全国に鳴り響きました。サイクロンは、再びミャンマー中東部を襲い被災者25万人を出しました。しかし、タンリエン孤児院の子ども達や地域住民はシェルターがあるため安心感があったそうです。

子どもには、安全に眠れる場所が必要です。ご支援いただいたことで子ども達の命を守るだけでなく、心の支えとなりました。重ねまして心より感謝申し上げます。今後も当会はタンリエン孤児院の子どもたちへの健康支援と教育支援を継続してまいります。

（地球市民ACTかながわ　事務局長 伊吾田善行）

タンリエン僧院孤児院新寮兼シェルター（写真提供：地球市民ACTかながわ）

鞍山だより『フロムA』（第2回）

･･･1学期を終えて･･･

中国の正月は春節(旧暦の正月)なので、1月1日前後に年末年始の感覚はありません。学生たちにとって、この時期は単なる期末試験期間。彼らは1月上旬に試験を終え、寮からそれぞれの家に帰り、春節を家族と過ごします。12月末の鞍山は、最高気温－14℃・最低気温－18℃。学生たちより一足早く、気温差20℃の元旦の日本に帰ってきました。

着任早々、宿舎のトラブル続きで参りましたが、人なつこい学生たちに囲まれて、楽しい生活をしてきました。日本語教師としては、週18時間という、日本の中学校並みの持ち時間の多さと、教科書の使いにくさに悪戦苦闘の日々。自分の授業時間以外は自由時間ではあるものの、授業の工夫と準備に神経を使うため、とても疲れます。そんなとき、学生たちが「一緒に食事に行きましょう」「買い物行くなら一緒に行きましょう」と、声をかけてくれるのが、本当にうれしかったですね。また、たまに一人で散歩に出かけた公園でも、子ども連れのお母さんや、お年寄り夫婦の方々が声をかけてくれて、温かい交流ができました。これらはみんな、日本国内では「反日デモ」「流出動画」などを巡って、「対中国外交問題」が騒がれていたころの話です。

体育館のような広さの学生食堂

鞍山は、中国では「偽満」と呼ばれている「旧満州」の産業を支えた鉄鋼業都市であり、本来反日感情の強いところです。そんな鞍山でも、日常生活にまったく変化はありませんでした。もちろん、例の尖閣諸島事件以降、学校側は非常に気を遣ってくれました。しかし、日本でのマスコミの騒ぎに巻き込まれていない私は、中国の人々と自由な交流を楽しんでいたのです。マス･メディアのあり方が問われる、いい事例になったと思います。

この便りがみなさんに届くのは、新学期(2月28日から)が始まったころ。私は再び鞍山の人となり、現地のようすや出来事、考えさせられたことを発信していきます。みなさんも、センセーショナルな報道に影響されない「自由な心」で、リアルタイムの中国・鞍山を「知って」ください。では、また。

（副理事長　斎藤　聖：日本語教師として鞍山に一年間赴任中）

☆斎藤さんの鞍山だよりが書かれているブログ「フロムA」
http://d.hatena.ne.jp/key-chi/

それでも未来は明るく平和であってほしい

「南北コリアと日本のともだち展」開催も目前に迫った11月23日、北朝鮮側から韓国の延坪島に向けて砲撃をしているとのニュースが飛び込んできました。そもそも境界線に合意がないために、南北間で最も緊張の高まりやすいこの海域。そこで着々と準備されていた米韓の合同軍事演習に真っ向から反発した北朝鮮が、実力行使に出たかたちとなりました。日本と朝鮮半島を常に覆う緊張関係を、少しでも克服したいと開催してきた「ともだち展」ですが、10年たっても国と国同士は対話のテーブルにつくどころか銃を向け合っている現実に、無力感を覚えたというのが正直な感想でした。

しかし、核、ミサイル、教科書問題、拉致…あらゆる「葛藤」にめげずにやってきた絵画展を中止する理由は何もありません。すでに集まっている、日本各地、韓国、北朝鮮、そして中国からも送られてきた子どもたちの絵、三百数十点。そして、東京・平壌・ソウルを巡って完成した大きな共同制作。こんなときこそ「平和への希望を失いたくない」というメッセージが込められた絵を見て欲しいという気持ちは、多くの方に伝わったようです。新聞やテレビでもとりあげられ、12月2日から5日まで、東京・青山のこどもの城には昨年の倍近い500名の来場者がありました。

また今年は、小学生の頃に「ともだち展」に参加したメンバーが韓国からも来日。週末のトークイベントには10人以上の高校・大学生が集まりました。多忙な彼らが足を運んでくれただけでも嬉しかったのですが、全員が「今思えば貴重な体験だった」と当時を振り返り、「平和をいち早く実現できるように自分ができることをやっていきたい」「自分の味わった感動や経験を後輩に伝えていきたい」と語ってくれました。これらの言葉は、先に感じた無力感を吹き飛ばしてくれるものでした。

ただ、今回のテーマ「10年後のわたし、未来のせかい」で集まった絵は、楽しい未来を描いたものばかりではありません。ある中学生は、「10年後の夢はないけれど、世界は平和で明るくあってほしい」と記していました。決して明るい展望ばかりではない現在、次世代に明るい未来を託すために、私たちは力を尽くせているのか？今回のテーマは大人こそ向き合うべきものだったかもしれません。　（実行委員会事務局　寺西　澄子）

日韓朝 3ヵ国の子どもたちの共同制作

マジカル・シュガーと貧困

地球の木では、日本ネグロス救援キャンペーン委員会(現NPO法人APLA)のネットワークの一員として、フィリピン・ネグロス島の飢餓に始まる砂糖農園労働者への支援を'07年まで行ってきました。そして、支援の内容をもとに、試行錯誤をくり返しながら「マジカル・シュガー」という開発教育教材をつくり始め、最終的に「すごろく」という形でまとまってきました。教材のねらいは、「町に食料があふれているのに、なぜ飢餓なのか」そして「自立的な生き方とは」を考えてもらうことです。「飢餓」というのは「貧困」の強烈なシンボルでもあります。「貧困」は、最近の日本でも、やっと可視化されてきました。ネグロスの砂糖農園労働者は、農園主のもとで隷属的な労働を強いられてきました。その姿は植民地時代の労働者の残影のようにも見えますが、私にはそれがグローバル経済社会の象徴ではないかと思えます。左下の表は飢餓が叫ばれた1985年ごろのネグロスと、昨今の日本の状況を比較したものです。

	ネグロス島	日　本	
関係者	砂糖に関係した人　150万人	非正規労働者　1736万人	
	砂糖農園労働者　20万人	派遣労働者　312万人	
失業者	6万人	派遣切り	18万人
原　因	ニューヨーク商品市場の砂糖価格暴落	アメリカのサブプライム・ローン	

現在のグローバル経済では、実体経済の約3倍にもあたる、180兆ドルともいわれる余剰マネーが、金儲けの投資先を求めてさまよっています。商品市場の価格暴落の前には、必ず投機家も介入した異常な価格高騰があります。またサブプライム問題も、返却できる可能性が低い人たちに住宅ローンの融資を行い、複雑な手法(詐欺的手法？)を駆使して証券化したものを、投機家にばらまいたことにあります。そして一番深刻な被害を受けるのが、それらとまったく関係がない、仕事をなくすと「明日どうして生きていこう」という人たちです。しかし、そもそも農園労働者や派遣労働者のように、日常的に慢性栄養失調の生活しかできない「ワーキング・プアー」のひとたちが、多く存在すること自体が問題なのです。私たちの暮らしの仕組みは、そのような人たちに支えられ成り立っています。このような発展のしかたが、決して豊かな社会をつくるとは思えません。以下の2冊の本は、アメリカとイギリスで60才近くの女性が、低賃金労働の体験をしたレポートです。日本もそのレースに参加していることがよくわかります。

「ニッケル・アンド・ダイムド」バーバラ・エーレンライク著
「ハードワーク」ポリー・トインビー著

（マジカルシュガーチーム　米林　大作）

地球の木カフェ in 鎌倉

初冬の木もれ陽が、名残の紅葉にひとときの輝きを与えた12月18日（土）、恒例の地球の木カフェが北鎌倉円覚寺内にある「寿徳庵」で開催された。小春日和にも恵まれ、会員や北鎌倉を散策に来た人たちが興味深げに訪れた。

地球の木クメールシルクチームの大薮明恵さんがアジアの布について話をした。大薮さんは織物についてのアドバイザーとして地球の木の支援プログラムの一つ、タケオ職業訓練センターを度々訪れてはお金を使わずにつやつや輝くシルクの糸を作り出す出す方法（日本でも少し前までやっていた稲わらを燃やした灰を、熱湯に溶かし煮るやり方）を教えて喜ばれ、センターの少女たちがいかに向上心が強いかを話した。

また大薮さんは、自分が収集しているアジアの布を何点か見せながら国によって、模様、糸の輝き、織り方の違いがある事を説明した。

カフェを訪れた人たちは、「寿徳庵」という静かな場所にふさわしいお抹茶や会員手作りのお菓子を味わい、地球の木支援のためのグッズを沢山買ってくださった。

（会報作成チーム　柏柳　妙）

収集した古布の説明をする大薮さん

活動日誌（12月～2011年2月抜粋）

12月
- 2~5日　南北コリアと日本のともだち展(青山こどもの城)
- 4日　グッズ販売（東戸塚デポー）
- 4~13日　ラオス訪問
- 9日　第6回理事会
- 11日　スタディツアー説明会
- 13日　第6回ブランチ連絡会
- 15日　地球の木サロン「Tea&Talk」
- 16日　グッズ販売（センター南デポー）
- 18日　地球の木カフェ in 鎌倉（円覚寺内 寿徳庵）
- 　地球の木サロン「ハングルに親しむ」
- 20日　港南区役所「人権研修」に講師として参加

1月
- 6日　臨時理事会
- 15日　地球の木サロン「ハングルに親しむ」
- 17日　カマルさん学習会（サポートセンター）
- 20日　第7回理事会
- 21~27日　カンボジア訪問
- 24日　第7回ブランチ連絡会
- 25日　出前講座「マジカルバナナ」（富士塚小学校）
- 26日　地球の木サロン「Tea&Talk」
- 29日　地球の木サロン「エッセイ修行」
- 　「マジカルシュガー」ワークショップ（なんぶブランチ）

2月
- 12日　「援助する前に考えよう」ワークショップ（よこはま国際フォーラム）
- 14日　「ラオスの森」ワークショップ（南養護学校）
- 15日　第8回理事会
- 16日　地球の木サロン「Tea&Talk」
- 17日　地球の木サロン「実践英会話」
- 19日　地球の木サロン「ハングルに親しむ」
- 21日　第8回ブランチ連絡会

INFORMATION

★地球の木のプログラムはあなたの会費で支えられています

第12回　地球の木総会のお知らせ

日　時：2011年5月28日(土)13:00～14:45　議事審議
15:00～16:45　同時開催イベント
「田島征三　ラオスの森を語る」(仮題)

場　所：オルタナティブ生活館2階「オルタリアン」
(JR／市営地下鉄「新横浜駅」下車徒歩7分)

※ 詳細は同封の「総会のお知らせ」をご覧ください。

年末募金キャンペーン2010報告

経済状況の厳しい中、皆さまのあたたかい志をいただき、厚く感謝申し上げます。

■ラオス村びと支援	38,800円
■カンボジア夢織り募金	56,800円
■ネパールしあわせ村民キャンペーン	75,200円
■無指定	276,240円
■合　計	447,040円

※お振込みいただいたご寄付の領収書は、今号の会報誌に同封させていただきましたので、ご確認お願い申し上げます。

地球の木カレンダー2011
「アジアの瞳」販売報告

今回も多くの方々にお買い上げいただき、ありがとうございました。

カレンダーの収益は、地球の木の支援地ラオス・ネパール・カンボジアのプログラムに使わせていただきます。

地球の木カフェ at 遊土

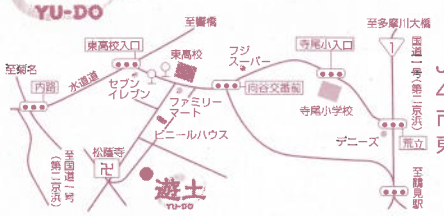
日　時：3月8日（火）～12日（土）11：00～17：00
場　所：器と雑貨の店「遊土」

3月の地球の木カフェは、鶴見にあるギャラリー「遊土」にて5日間開催いたします。支援地のラオス・カンボジアから春のスカーフが入荷いたしました。

マクロビオティックのランチもご用意いたします。11日は「ラオスDAY」です。ラオスランチを食べながら、ラオスの話が聞けます。詳細は同封のちらしをご覧ください。（ランチは予約が必要です）

遊土 YU-DO

器と雑貨の店　遊土　営業時間11：00～17：00
〒230-0077　横浜市鶴見区東寺尾1-31-15
TEL&FAX 045-573-6645



JR鶴見駅西口
4番のりば
市営バス41系統
東高校前下車5分

地球の木講座2011

今の日本って何か変と思っているあなた。自分たちにそう思わせる社会とは一体どうなっているのでしょうか。それを経済から解りやすくお話します。

近頃使われ始めた「連帯経済」という言葉。それは利潤の追求ではなく、人間を中心とした助け合いの小さな経済活動の総称なのです。

日　時：2011年3月26日(土) 13：30～16：00
会　場：横浜市開港記念会館　2階　7号室
(みなとみらい線「日本大通り駅」徒歩1分、
JR／市営地下鉄「関内駅」徒歩10分)
講　師：内田　聖子さん（特活）アジア太平洋資料センター事務局長（PARC）
※詳細は同封のちらしをご覧ください。

教材体験フェスタ2011

グローバリゼーション、貧困、環境、人権、平和、異文化理解など、学校や市民活動で使える様々なテーマの参加型学習の教材のねらいや進行のポイントを学ぶことができます。

日　時：3月26日(土)・27日(日) 各日10:00～18:00
27日(日) 10:00～12:10地球の木
「マジカルバナナ」ワークショップ
会　場：東京YMCA社会体育・保育専門学校
(地下鉄東西線「東陽町」駅西口2番出口より
徒歩3分)
参加費：2日間￥8,000　1日￥4,000
主　催：特定非営利活動法人 開発教育協会
申し込み：直接 開発教育協会へ
TEL 03-5844-3630　FAX 03-3818-5940
URL http://www.dear.or.jp/index.html

書き損じハガキ、未使用切手がありましたらご寄付ください

年賀状の整理はお済みですか？印刷ミスや書き損じで未投函のハガキがありましたら地球の木へご寄付ください。また、引き出しの中に眠っている未使用切手もありましたらお送り願います。

地球の木は「認定NPO法人」格を取得しました

2010年7月16日以降のご寄付に関しては、皆様が確定申告で寄付金を所得控除できるようになります。
また，神奈川県と横浜市の個人住民税からも控除となります。

★ボランティア募集！
発送作業、イベント手伝いなど